

Title	島崎君を送る
Sub Title	Farewell Professor Shimazaki
Author	服部, 謙太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1982
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.3 (1982. 6) ,p.229(1)- 230(2)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	島崎隆夫教授退任記念特集号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19820601-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

島崎君を送る

服部 謙太郎

島崎君は私より一級上にいた。二人とも当時の理財学会委員をしていたので、自然と知り合うようになった。誰かが、「あの人は優を沢山とった人だ」と教えてくれた。彼は学校の成績が良く、卒業してすぐ助手になった。当時の助手は一学部につき、毎年一人だけ採用されるのだから、なかなか権威ある存在であった。

島崎君は昭和十六年三月、私は十二月に卒業し、相前後して兵隊にとられた。それから四年近い歳月が過ぎ、二人とも運よく生き残って、東京に帰ることができた。そして再会したのは、二十四年の夏ころだったと記憶している。それまでの私は、京大や東大などを、あちこち遍歴していたが、また元の古巣の三田山上に舞いもどって、経済学部研究室に籍を置くこととなったのである。その時の島崎君は、小池先生のところの助教授であったと思う。学校の勝手のわからぬ私は、当初は何かと彼のお世話になった。こういう時の彼は実に親切で、行きとどいていた。

そのうちに、例の「樋籠村の協同研究」なるものが始まった。これは当時の野村兼太郎教授所蔵の、武蔵国葛飾郡樋籠村の「田中家文書」を、皆で手分けして読み、その内容をカードに書きとるという仕事であった。これは仲々の大仕事で、朝の十時から夜の八時ころまで、読みにくい古文書を相手に、悪戦苦闘の日がつづいた。この作業に参加したのは、島崎君と私の他には、宇尾野久、宇治順一郎、金丸平八、中村勝己、新保博の諸君がおり、後には更に数名の人が参加したように思う。

島崎君はこの集団の級長格で、野村高村両先生とのパイプ役をつとめていた。この協同研究を通じて、前記の七人は急速に親しくなり、私と島崎君との交際も、以前より親密さを加えた。一緒に史料採訪の旅もしたし、三田学会雑誌で、「関東農村の史的研究（第一集）」として、「樋籠村」の特輯号を出すために、共に苦勞したこともあった。

この前後か、或いはその少し前か、彼は小池先生の下から、野村先生の日本経済思想史の後継者として、スカウトされたらしい。どのような事情があったのか、私たちにはわからなかったが、これによって彼の進路が、かなり違ったことは確かであった。しかし、「関東農村の史的研究」はその後も続けられ、私が二十八年に退職するまで、この協同研究には彼も毎回参加していた。

島崎君を送る

島崎君は本質的には、学者より教育者にむく人であったと思う。あのキリストとお釈迦さまが合体したような人柄の前には、どんな悪党でも改悛するに違いない。彼が長い間、野球部長を勤めたのも、野球を通じて、学生を教育することに、情熱を感じたからではなかろうか。

今度、彼は慶応を定年退職して、伊勢松阪の大学に教授として赴任するという。聞くところによると、この学校は新設されて間もなく、すべてはこれから出発するとのことだ。教育者としての彼が、情熱を傾けるには、好箇の職場であると思う。彼の今後の健闘を祈ってやまない。

考えてみると、私はわずか三年の慶応在職中に、多くのよい友人を得ることができた。それらの人々とは、今も親しく往来している。しかし、その中で島崎君ほど、私が安心して遠慮なくつき合った人は他にいない。それは天性の善人である彼の人となりだが、そうさせたものと思う。

私にとって島崎君は、生涯の良友というべき人であろう。

(服部時計店 取締役社長)